
NATURAL * story

嘉手奈 * 燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NATURAL* story

【Zコード】

Z6679A

【作者名】

嘉手奈* 煙

【あらすじ】

人気BANDのギタリストと、主人公が出会う

NATURAL*HEART

主人公 和香野 琉

琉は、神戸に住む中学3年生。名前が琉球の琉とつじて、あだ名が『シーサー』になってしまつ・・・
ある日、琉がギターに目覚める。きっかけはNATURAL*HARDというバンドのメンバー、ギター担当の晃流（？）、ギターに目覚めた。

夏休み、終業式が終わつた後、親友の奈那が
「琉～？沖縄に一週間行くんだけど行く～？」
と言つてきたのだが、琉は即答

「イヤ

と返す。

だが奈那は琉を絶対に連れて行く様子で
「N*Hが夏フェスでライブのために来てるよ?
絶対行く!!!!」

と、琉の目が光る。

で来たものの・・・（海は大荒れ）

「なんでも～（・・・）～」

その日は台風が接近中・・・

菜那が、

「まあ今日はホテルでゆっくりしようと～」

「え～」

「しようがないじゃん～！」

「私、外に出る～～～！」

「琉！？外は台風・・・」

パタン・・・。

「しようがないか。N* H田当てで来たんだし。でも外は台風！！」

琉～～～！」

奈那が止めに行く

その頃、琉は・・・

「あ、この店つてまさかギターショップ？ゴッド・・・GODS
OUNDS？？まあいつか」

店に入る

「いらっしゃい」

「これ（紙を見せる）・・・ありますか？」

「えっと・・Gibson 1958 LESPAUL JUNIOR
ORDUですか。少しお待ち下さい。」

あたりを見回す - わあ～いっぽいあるな～
店員が奥から出てくる

「すいません。在庫もちょっとないんです。」

「あの～ちょっと。」

見知らぬ男が店に入つてくる

「おう、秦。」

「久しぶりだな、鍛冶さん」

「一人は知り合いかな～？」

「で、用件は？」

「ああ。さつきあんたらが話してたギターの事でちょっと

「ギターね」

「名前は？」

と、琉を指す

「えつ・・琉・・・和香野 琉です」

「ギターの種類は？」

「Gibson 1958 LESPAUL JUNIOR DC

ですけど」

「LESPAULか」

「それだつたらあげる」

「えつ」

「ダメですよ。そんな高い物つつ---」

「いいの いいの。まだ何本があるし」

・秦は笑つてゐ

「でも・・・」

「それに、高いとか言つても・・琉だつたけ? 鳴おうとしたじやん」

「---! ---!

「それでも」

「人の好意は素直に受けれるモノ」

「秦さん・・・はお金持ぢですか?」

「アハハッ!! お金持ぢじゃないよ。それと秦でいいし、多分、歳近いと思つよ?」

「秦・・・は何歳?」

・琉が恥ずかしそうに言つ

「高一の16歳だけぢ」

「うそ・・・!」

・「んなにかつこなくて大人っぽいのにな---!!

「まあまあ、でどうするの?」

「どうしようつ・・・」

「はい」

・名刺?

「これ・・・。ハッ!!」

職業欄を見る

NATURAL*HARD

ギタリスト

「えええっつ……ニキヒの……秦……？」

「ただけど?」

- 秦が微笑む

「まあいつでも来てよ」

「同じホテルだし・・」

「その名刺は夏フェスの沖縄バージョン。でこっちもあげる。俺の住所入り」

「じゃあこれ私の名刺です・・」

「ありがと。あつそだケー番交換しようか?」

「はいっつ

- ケー番を交換する

「じゃ、いつでも気が向いたときに遊びに来いよ。ギターの事とか話したりできるし」

「秦、いいのか?外・・もうそろそろ帰らなくって」

- 店員が入ってくる

「あつやばつ」

- 女の人が店に入ってくる

「秦、こんな所にいたの」

「マネージャー」

「ホテルに帰るわよ、秦」

「なあ、マネージャー。琉・・・ここつもいいいか?」

「秦が琉を引き寄せる

「いいけど、どこの子?」

「同じホテルのやつ」

「あり、そう。それじゃあいくわよ」

- 車内

「琉はなんで沖縄に?」

「ええ~~~~~つと(〃) 友達が『ニキヒが来る』って言つてた

から

「友達と一人で？」

「はい」

「そうか・・・わかった

「??？」

- ホテルに着く

「琉は何階？」

「私は6階」

「それがどうかしたの？」

「いや、同じ」

「なんだ」

「一緒に行こうか？」

「うん！」

- 部屋に着く

「それじゃあ、また明日。じゃーなっ

-『また明日』つてどうこう～～～～～？！また会えるかな・・・

旅行二日目（夏フェス リハ）

- 琉が部屋を出よつとする

「琉、どこいくの？」

と、菜那

「ちょっと、ね

「じゃあ昨日は何処に行つてたの？」

「ギターショップ」

「そう、確か琉つて最近ギターにハマつてたよね？」

「うそ。でも今日せりふreiraの辻をひたと散歩。それじゃあ
行っておまゆい」

「行つてきます」

「行つてらつしゃい」

琉が部屋を出る

五
五
五

「アリ・ハ、お おせきうるさい」

「そんなにかじりまらないでいいって」

- 秦が笑いながら言つ

「秦、今日はどうしたの？」

「一応、今日、午前中は夏フェスのリハ」

「午後は？」

「自由。なあ琉

いの！」？

うん、だて昨日知り合ったばかりなのにお前といふと楽しいも

h

- そんなん…・・・!!

一
璇
腦
內

さわやか ! ! ! !

口說二
卷之三

卷之三

「ニシシ、ルニウムアリテ」
セイ 煙笑

白人

日記

ג' ערכות

顔を覗き込む

「うん、別に…・・・！」

・また赤くなる

し・・・秦の顔がつづ！！！

「琉、リハにそろそろ行こうぜ

「琉、リハにそろそろ行こうぜ

「う・・・うん」

夏フェス会場

- 琉、会場に驚く

「秦、今日つて歌うの？」

「歌うのは立ち位置を決めてからね
立ち位置が決まり歌い始める
すうじ・・・！」

- 歌い終わる

「琉、どうだつた？」

「かつ・・かつこよかつた！..」

「喜んで頂けて嬉しいです

(なぜいきなり敬語?)

「秦・・は頬からじりすむの？..」

「さあ、どうしよう?..」

「じゃあさ、ノゾエのメンバーに会える？」

少し秦がムツとなる

「別に・・いいけど」

「じゃあ、どこで待ち合せせる？」

- 琉が嬉そうに囁く

「昨日のGOD SOCONDOで」

「分かった。それじゃあつー！」

「う・・ん。」

- 琉が戻ろうとする

「つつ・・・」

- 秦は手を握る 琉が戻つてくる

「秦つ、一緒にホテルに帰ろ?..」

「うん」

-
帰
り
際

「そりいえば、秦はいつ帰るの？ライブは明日だよね？」

「でも、巯つてライブのチケット取れた?」

「ううん。予約いつぱいで取れなかつた

ל' נובמבר

「でも、つづ秦に昨日会えて良かつたと思つてゐる。」

「うん。俺も。じゃあ、はい。プレゼント。友達の分も」

「え・・・！？最前列？」

「うん。最前列でギター弾いてる俺がよく見える様に右より」

۱۷۰ - ۱۷۱

(なんでもそんなにサバシと叫ぶのはいいが、
！？)

秦が手を握る

卷之三

「マイブのチカジのギルがひつりボトムで。」

۱۰

二八

- ホテルに

「かつかた」

・琉唇食をすまし、ギター・ショップへ行く
分が、た

(秦達まだ来てない・・?)

ギターショップのドアが開く

「琉？」

「秦！」

「 応みんな連れて來たけど・・・」

「まつり」で「まつり」の意味を学ぶ

「ベース担当 曲崎 鑿です

「驚か大人つまく見えて毛高2の16歳

卷之二

卷之六

「昂乃 弘壱・・秦と同じギター担当だ」

「弘壱はこう見えて金持つあ、ヤクザじゃないよ」

・昇也が言つ

「ヤクザなんかじゃねえ！？」

・弘壱が反対する

「あはは」

・昇也が愉快に笑う

「椋は？」

「えつとボーカル担当の、茶宥 椋です」

「えつ・・・椋！？」

「う・・・うん」

「すごい！椋の声一度聞いてみたかったんだ」

・琉が絶賛

「琉！ちょっと・・・」

「何？秦」

「あいつらや、結構口説くの上手いから氣をつけろよ」

・分かつた

「ねえねえ琉つていうんでしょ？」

・昇也がきく

「うん」

「そういえば午前中のリハに来てたよな？」

・馨が言つ

「確かに秦つてそのこの事話す時すつづいて楽しむだつたよねえ」

「わつ・・・ばかっ」

「え? どういう意味?」

「つうん何でもないよ」

・秦がこまかす

「それに、秦つて琉ちゃんの・・・」

・秦が椋の口をふさぐ

「まあそういう事はおひどいて・」

「ねえねえ、琉ちゃんって何歳？そんでビックリ住んでる？」

「中3で神戸に住んでる・・・」

「へえ。いいな」

弘嵩が嬉しそうに言つ

「でも私はほかのところに住みたい」

「なんで？」

「ううん秦の家の近くに住めたらいいなって。FANとして別にFANとしてじゃなくってもいいのに」

店員が

「よお久しぶり、みんな」

「鍛冶さん！久しぶりっ」

「みんなでかくなつたな。そういうえばあんときはまだお前らは中2か中3だつたよな？」

「そうそう」

「なあどつか行こーぜ」

「うん」

「でもせ、あんまつひつくなつてマネージャーから言われてんじやん」

「あとホテルも違つし」

「いや、ホテルは一緒だ」

「そなんだ！」

メンバーガ驚く

「ホテル戻つてゲームでもする？」

「いいよ」

と琉が言つ

「じゃ戻るか」

ホテルに着き、遊び終える

「琉、俺明日の朝からいなかから。じゃあな、明日のライブに絶対に来いよ！――」

「うんっ！絶対に行くーー！」

「琉が部屋に戻ると、菜那が待っていた
「琉、今さつき一緒にいたのって誰？」

「え、つと昨日ギター・ショップで会つた

「ふうん。まあ私も今日ある人と出会つたし」

「えつ！だれ、だれ？」

內緒

何を言つても菜那は教えてくれなかつた

旅行3日目 ライブ当日

「ねえねえ、N*Hのライブに行こー！」

・と言ふチケットを見せる

「どうしたの？！そのチケット絶対手に入らないと思ってたのに…」「どうやって手に入れたかは、内緒　」

・ラベルが貼り

「あやあ~~~~~！

! . ! . ! . ! .

- N*HのFANが叫ぶ

جایی

琉にとってこのライブが人生初だった
ライブ終了後、琉が可凪かこ行こうとする

「琉、どこに行くの？」

「アヒト・・・ちよひと田舎」

用事があるても今日は逃がさない〜〜！」

「わあビックリに行くか白状しなやこー。」

卷之三

(       )

・ライブ終了後、樂屋

お疲れ様です

「そうだ、櫻、今田ノゾ大丈夫だったのかな？」

「アーティストの才能が、たかく」

「給」字之形

「琉！」

「秦、一人ちょつといるけどいい?」

- ? 別にしあげど

卷之三

二

「へえかわいね

- 昇也が口説き始める

奈那ちゃんは誰のファン? 一

和は異世の「ソシ」

卷之三

「〇〇二〇」

「わかつた。別に私服でいいから」

「ドアを開け、中へ入る」である。

「君、誰だ？」

「あつ、すみません社長。彼女俺がよんだんですね」

「そうか」

「あつ、秦、これつ」

-琉が秦に渡す

一
何
?

「ライブのチケットのお礼と、後、夏フェスお疲れ様」

「・・・あ・・ありがとう。それじゃあいいちもお礼・・・」

- 琉にキスをする

「アーティストの心」

「戻りそむ一人さん」

異常、秦が井戸をしたあかげで打ち上げの事は後の方しか記意の

こつてなくつて、

「やういえば秦は明田どいつあるの?」

「明日はオフもらつた」

え・・・！」

お邊へとへいために

「」の言葉の後、なぜか今まで秦のファンだというだけだったのに、秦のそばにいるだけです」とくどきどきしたでもどうしてもこの真実を受け入れる事ができなかつた

「す、ごく恥ずかしかつたので」

旅行4日目 一日だけのフリー

-朝日覚めると・・・?

「ん・・・・・?んんつ！?」

- 秦の顔がかなり近くに！?

「あ、琉やつと田が覚めた?」

「なななつなんで？！ここに！」

「部屋に入れちゃった。まさか同じホテルだとは」

「奈那」~~~~~

「！~」

「そういえば今田はオフなんだしょ？」

「そうやつ！」

- 奈那がうれしそうに

「私は今日、N*Hの昇也と買い物するの。琉は秦と買い物？」(テ

ート)

「えつなんで・・・」

「言い訳なんてしなくつてもいいって

「だから・・・」

「あ、私待ち合わせ9時だから」

「じゃーねー」

「奈那つ！」

- 部屋のドアが閉まる

「あーあ」

「琉、早く出よーゼ」

「う・・うんつ。でもなんで秦はこんな朝早くから？」

「言つたじゃん。リハの時、お前どいつも楽しそうで

「あ・・・」

「琉の寝顔つてかわいいな」

「~~~~~」

「寝てた方が悪い！それよりつ

「うん。わかつた」

「じゃ俺、外で待つてる」

- 瑞の部屋の前

「やべえ。俺、瑞が起きる前に何しようとした?」

- 瑞が部屋から出でてくる

「待った・・・?」

「ううん、全然。それよりどつか食べに行ひつか

「うん!」

- 町を歩く

「なんで沖縄の事いろいろ知つてるの?」

「んーとね、N*Hがデビューする前に一人沖縄に住んでるやつが
いたの」

「えーっと確か・・弘壱! !」

「そ。で、弘壱とはあのギターショップで会つたの」

「そりなんだ~」

「あの店の鍛冶さんが音楽好きだつて紹介してくれたつてわけ
「以外」

「まあそれから弘壱と話が合ひよつになつて、昇也と馨と棕をつれ
て沖縄へ来たらますます

仲が良くなつて。それでバンドN*Hを結成したわけ」

「だから詳しいんだ」

「それに沖縄つて観光だけじゃなくつても楽しいし」

「だつて今回は秦に出会えたから・・・」

「俺も。あ、ここに入る?」

- 秦が店を指す

「喫茶?」

「うん。でもちよつと違つけど

「じゃあ入ろ!」

- 店に入りオーダーする

「秦は今日こんなにうろついていいの？」

「別にいいんじゃない？うろついてても」

「曲は誰が作ってるの？」

「みんなで作るときもあるけど、大体、棕と馨と昇也が作ってる。
むしろみんなで作る方が少ないの」

「秦と弘壱は？」

「俺と弘壱はギター・オンライン」

「ギター好き（笑）」

「そうだよ」

「ふふふ・・・」

「ちょっと変わった笑い方？をする琉

「琉・・・」

「何？」

「秦が琉の顔に触れる

「どうしたの？」

「秦が我に返った様子・・・」

「秦・・・？」

「ああ・・・ごめん」

「何誤ってるの？誤る必要ないのに・・・」

「？なんで」

「やつ・・・別になんでも・・・！」

「なぜかこの時から二人の関係はギクシャクし始めた・・・」

「喫茶から出る

「ねえ・・・」

「何？」

「秦つて好きな子いる？」

「いるよ」

「少し残念そうに

「そう」

「なあ琉、これいる?」

「これって……?」

「これ……」

・秦がラッピングしてある箱を取り出し、琉に渡す

「何……?」

「ホテルに帰つてから開けろ（＝）」

・秦が顔を赤らめて言う

「え……?」

・琉は不思議に思つている

「いいから……!」

「うん、わかつた。ホテルに帰つてから開けるね」

・琉、どつか行く?

・じゃあさ、どつかで買い物しよ?」

「いいけど

「どつかいい店ある?」

・結構あるよ

・ホテルの帰り道

「秦は明日帰るんでしょう?」

「帰るよ。東京に何時頃?」

・さあ……。じゃあさ、あしたメールするから見送りに来てよー。」

・絶対に行くよ」

・ここから少しづつ話が途切れていって、恥ずかしいように秦の顔も見ることができなかつた

・ホテルに着く

・「じゃあさ、明日メールするから絶対来いよな!」

「分かつてゐる

「また明日」

「うん・・・」

- 部屋に入り、ベッドに寝転がる

- 『そうだ、あの包みの中に何が入つてゐるんだろ?』

- どきどきしながら包みを開けてみる

- 『なに・・・? ネックレス! ?』

「あーかわいー」

「奈那つ」

- 秦はなんで私にネックレスをくれたんだろう? ? ?

- 1月の4日間、夜には『また明日』って秦に言われてたけど、そんな日はもう今日で

終わりになる・・・

- このときから寂しさを感じていたのかもしれない

旅行5日目 別れ

AM9:30 - 秦からメールが届いた
『あのギター・ショップの前で待つてゐる』

という内容だった

「奈那、ちょっと出かけてくる!」

「ちょっと・・・急になにつ・・・」

- ギター・ショップ前

「秦つ! !」

「どうしたの、そんなに慌てて

「秦からのメールだつたから、早く行かなきゃって」

「俺のため?」

「そつ・・・かな?」

「ありがとう

「秦、琉に抱きつく

「秦・・・。」

「少しの間、こうしててもいい?」

「う・・ん」

「5分近くが経つ

「あ・・・『めん長すぎたよな。少しの間だけって言つたの』

「悪くなかったよ・・秦なら許してもいい

「琉から離れる

「俺だけ?」

「秦は特別」

「そうだ、あの包み開けてみた?」

「うん。開けたよ

「秦が顔を赤くする

「秦は私の事ただのファンだと思つてる?」

「会つた時にはそう思つてたかもしれない。だけど一緒にいるのが

「すごく特別な存在

になつていった・・

「私も同じ。ていうかホンモノに会う前も特別な存在だつたかも」

「琉は俺にとつて唯一の恋愛対象になつた女の子」

「それつて・・・?」

「はつきり言つと、好・・・き・・かな?」

「秦は顔を真っ赤にして言つている

「『かな』じゃなしにはつきりいつてよー。」

「じゃ好き」

「私も同じ」

-キス

-空港

「じゃ、これからはメールするからな」「私はぜつたいするよ！」

「たまにこつそり会いに行くかも」

「その方が嬉しい」

「あのネックレス大切に」

「ネックレス、とても大切な物だよ・・・秦

「じゃーな

「うん」

キスをする

「遠距離恋愛か〜」

「奈那つ！！」

「隠さなくて済む感じがないって」

「む〜〜〜〜

「じゃあたしらは観光の続きでもしましょうか

「じゃ行こ〜〜〜〜！」

秦に出会つてからたつたの4日で両想いになつたのはすぐ嬉し

い

だけど・・遠距離恋愛つていつ所が寂しいな・・
次はいつ会えるだろう?

やつぱり、恋に支障はつき物だなあ〜

(後書き)

もつ、楽しんでください（（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679a/>

NATURAL * story

2010年12月30日20時48分発行